

## 日本山岳会への提言

# 最近の遭難と登山者の自立

黒川 恵

中高年の登山ブームとともに最近の遭難は、一般登山道での不注意による事故が増えるなど様変わりしている。指導委員会委員長である黒川恵氏に、日本山岳会会員の登山者としてのあり方を綴ってもらった。

### 昨年中の山岳遭難の状況

夏山シーズンを前に、7月5日から2日間、富山市で「全国山岳遭難対策協議会」(第44回)が開催された。この協議会は、文部科学省や警察庁などが主催するもので、各都道府県の山岳関係者や警察、消防などから、約200名が参加した。その主な内容を報告しよう。

### 過去最悪の状況

警察庁がまとめた平成18年中の山岳遭難発生状況は、発生件数1417件、遭難者数1853人、死者・行方不明者278人である。これは、発生件数、遭難者ともに、昭和36年以降、過去最高を示した。10年前の平成9年中と比較すると、発生件数で602件、遭難者数で

892人と、死者・行方不明者は81人と、いずれも増加している。発生件数と遭難者数は倍増以上となつているが、死者・行方不明者数が4割増でとどまつているのは、深刻な状況に至る前に救助されていくからだ。それだけ救助技術が高まっていると考えられるのではないだろうか。

40歳以上の中高年登山者が8割以上

遭難者の年齢別では、60歳～64歳が最多で292人、40歳以上の中高年登山者が全遭難者の81・3割、実に1507人となつている。20代と30代では267人だから圧倒的に中高年者の事故が多いということだ。

### 態様別ワースト3

道迷いが714人(38・5割)、

滑落が286人(15・4割)、転倒が204人(11・0割)となつており、全体の65割近くをしめていく。これら事故の大半が、いわゆる一般登山道か、そこから迷い込んだ山中で起きているとすれば(実際もそうだろう)、もはや不注意による自損事故と言わざるを得ない。

単独登山者の遭難では四分の一が深刻な結果

単独行での遭難者は497人で、全遭難者数の26・8割であり、そのうち死者・行方不明者は129人となつている。これは、全単独登山者の遭難者数の26割にあたる。全遭難者における死者・行方不明者の割合は15割であるから、単独行の場合の割合は約1・7倍と高くなつている。「単独行よりツアー

登山」といった標語が叫ばれるようにもなりかねない。実際、救助現場では単独行者の捜索には難渋するのである。

4割以上の遭難者が、遭難現場から直接救助要請

全遭難者の43・9割が遭難現場から通信手段を用いて救助要請している。携帯電話の普及によって、携帯電話による救助要請が増加することが予想されるが、通話エリア内では有効であっても、多くの山岳地帯では通話エリアが限られているのが現状である。予備バッテリーの持参や要所での事前感度チェック、低温などによる機能低下についても充分注意が必要だ。

### 近年の山岳遭難の傾向

かつては、岩場での落石や転落、冬山での雪崩や行方不明が山岳遭難の代名詞だった。「そんな危険なところへ行くんじゃないよ。山岳部なんかぜったいダメだ」と親に釘を刺されて山登りを断念してきた世代が、いま中高年になって、憧れの日本アルプスをめざしているのかもしれない。一般登山道で浮き石や濡れた木の根を踏んだり、雪渓でルートを失ったり、道迷い

のあげく転落して命を落としているのが、最近の傾向のようだ。

体力や技術不足、気象判断の誤り、装備の不備など、登山の基本知識を欠いた遭難が多い。それらが前述のワースト3につながっている。中高年登山者の増加が遭難の態様を変化させているとも言えるだろう。

山を楽しむために

登山は、「計画、実行、記録、反省」から成り立ち、反省の結果、示された課題には対策をもってあたる。「山を楽しむ」ことの最低条件は安全の確保にある。企画立案の段階から実行段階を通じてそのことが一貫されていないならばならない。

登山は「スポーツ」だ。背中に赤ん坊くらいの重荷を背負って1日何時間も歩きつづけることは相当の負担である。たとえ日帰りハイキングとはいえ1リットルの水と食べ物、雨具などをザックに納めれば5キほどにはなる。このように、1日中継続するスポーツは登山をおいて他にはないだろう。そのことを思えば、安直に山に入ることではできないはずだ。しかし、近年の山岳遭難で最も多い原因は、前



最近、遭難者の多くがヘリで救出されるようになった。北ア・燕山荘で

述のとおり不注意によるもの。どんなに低い山でも自動車道がなければ「山」には救急車が入ってこない。ヘリコプターも万能ではない。結局頼れるのは自分自身なのだから、自分の身は自分で守りたいものだ。昔から「ケガと弁当は自分もち」と言われてきたが、それが自然の中に身を置くときの大原則である。

とにかく「安全なくして、楽しみなし」であり、楽しみのために事前学習が不可欠ではないかと思う。そして万一のために「セルフ・レスキュー」の知識をもつことが、これからの登山者としての常識となつてゆくだろう。

### 本会指導委員会の試み 公益活動について

委員会活動の一環として私たち指導委員会も、かつては会員に向けて山での救急法や雪崩講習会、アイスクライミング講習会など多岐にわたつて行なってきた。山岳遭難実態調査も2年間実施し、それなりのデータ収集ができたが、その後、個人情報保護などの関係で残念ながら今は行なっていない。人気のあるイベントには多くの参加者があるものの、全般的に講習内容が硬派で宣伝も下手なせいから、満員御礼というわけではなかった。日本山岳会の多くの会員は、さまざまな所で山岳に関する学びの場を得ることができているから、委員会として気軽に講習することなどは少なくなっているのかもしれない、などと思つたりもしている。

しかし、数年前に上高地から焼岳登山を山の救急法講習をからめて実施したことがある。そのときに参加した会員の方から、「君たち、こういった役立つ講習会なら、各支部を回ってやったらどうだ」と励まされ、うれしかったことがある。



医療委員会と共催で行なわれた救急救命法の講習会

近年は、公益社団法人としての自覚を高め、さらなる実績を積み上げなくてはならない。実は経費分担の理由もあるのだが、医療委員会や海外委員会とも協力しながら広く一般に向けても、救急救命法や突然死問題、辺境医療、公募登山シンポジウムなどを開催してきている。昨年は、スキーチューンナップ専門店にも協力してもらい、座学から雪山での実地講習まで行なったが、それには、のべ100人ほどが参加してくれた。医療委員会との共催講習会でも会員ではない人たちの参加も多く、対外的公益活動としては多少の成果をあげることができただろうと指

導委員会内部では自負している。公益法人の認定に関する法律がある以上、日本山岳会としても公益活動の重要性が問われるところへさしかかっているのではないかと思っている。

**山岳救助隊と登山者の出会い**

前述の全国山岳遭難対策協議会では各県警救助隊の方々と懇談する機会が多い。7月の富山でも、最近の山スキーやスノーボードの多発事故が話題になった。遭難者の多くは、「まさか、自分が……」と思うものであり、救助隊と遭難者は、当たり前のことだが、事故が発生してから出会うのが普通だ。

一般登山者にとつては、山岳救助隊の活動や救助現場を目の当たりにすることはめつたにない。とくに山岳団体に加入していない未組織登山者やスノーボーダーにとつては救助隊の実際を知らない人のほうが多いだろう。

指導委員会では、20代から30代にかけての山スキーヤーやスノーボーダーに声をかけて、前述のように昨年度からは継続的な講習会を実施している。救急救命法や雪崩対策の机上講習からスタートして実地の雪山講習までを段階的に

進める方法である。リーダーシップとメンバースhipについても学習してもらおうにもしている。

対外的公益活動の一環として、こうした日本山岳会会員以外の人たちを対象として、11月には、長野県警山岳救助隊の隊長から講義を受ける計画をもっている。実際に救助現場で隊員がどういう判断を下し、どのように行動をするのかを知ってもらうことが主眼である。この一連の企画は、受講者にはなかなか好評のようである。そうして、受講された人たちが本会入会を決議してくれたらまさに一石二鳥である。

**自立した登山者へ**

いま、登山界は、山岳会や山岳部で体系的に登山を学ぶシステムが、崩れているように感じてならない。リーダーのもとで主体的に登山行動するのではなく、引率者にしたがつてついてゆく形態が幅を利かせているのではないだろうか。山には信号機がないから、行くのも止まるのも、本来は登山者自身が決めなくてはならない。しかし引率者という信号機によりかかった登山ばかりやっていると、自らの危険予知能力ともいえる、

ネパール 三つの峠越え  
レンジョラ〜チョララ〜コンマラ24日間  
11/2 発 ¥457,000

クエンプの代表的な3つの峠を越えるロングトレッキング。ターメ谷からレンジョラ5340mを越えコーキョーピーク登頂。チョララ5330mを越えカラバートル登頂。コンマラ5535mを越えチュクンへ。

**Weco** 株式会社ウェック・トレック  
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員  
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8 山内ビル4階  
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

信号機能がどんどん低下してしまふに違いない。

そういった信号機能低下登山者ばかりが増殖してしまつたら、日本の登山文化は死滅してしまふ、と心底思うのである。たとえば、ツアー登山であろうと公募登山隊であろうと、登山は、自らの意思と技術と体力で行なうスポーツなのだ、ということをもいつも肝に銘じていることが必要だ。それが、自立した登山者として欠くべからざる気骨である、と言つてもよいのではないだろうか。